

謹賀新年



デア ハーフエン Der Hafen

Nr. 65
2023年1月-3月

年頭所感（時代の転換点：Zeitenwende）

横浜日独協会会長 成川 哲夫

昨年(2022年)は新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き、ウィズコロナによって世界の社会経済活動がコロナ以前に復することが期待された年であった。しかしながら、そうした期待は2月24日のロシアのウクライナ侵攻によって裏切られることとなった。ロシアのウクライナ侵攻は、これまでの世界秩序を大きく変えるリスクを内包しており、我々は、今正に時代の転換点に立っているのかもしれない。日本においても、そしてドイツにおいても、戦後長らく国民の間に浸透してきた平和と自由、民主主義、法の支配といった国家理念が今ほど揺さぶられ、危機に瀕していることはないと言えよう。

ドイツは、戦後日本と同様の国家理念の上に経済発展と繁栄を築いて来た。ロシアのウクライナ侵攻は、核大国ロシアと陸続きで国境を接するEUの中核として、またロシアに過大なエネルギー依存を続けてきたドイツにとって、その衝撃と危機感は日本の比ではない。

こうした事態に直面したドイツの安全保障政策の劇的な方向転換もまた衝撃的と言える。2022年2月27日、ドイツのショルツ首相は連邦議会で演説を行ない、それまでの政策を180度転換し、ロシアに対する厳しい経済制裁、防衛費の増額、ロシアへのエネルギー依存からの脱却などに踏み切ることを表明した。印象的なのは演説のなかで「時代の転換点 (Zeitenwende)」という言葉が繰り返し出てくることである。

ウクライナの戦争が他のヨーロッパ諸国に波及するのを防ぐためにはNATOの結束が求められるが、そのためにドイツはリトアニア等のNATOの東方の防衛強化へのさらなる貢献に努めるとした。ヨーロッパの平和と自由、民主主義を守るために連邦軍を強化し、2022年に1000億ユーロ、以後GDPの2%以上を防衛費として投じるとしている。この政策転換に関しては、現在のところCDU/CSUを含む主要政党も世論も、この決断を概ね支持している。しかしながら、ドイツの外交・安全保障政策が実際にどのくらい転換するのかは未だ不透明と言える。ロシアの戦争に対する現状の広範なコンセンサスも、経済制裁がドイツ国民に大きな「痛み」をもたらしたとき、それに耐えうる論理が求められるだろう。SPDは、もともとロシアとの経済交流を通じた和解を重視してきた政党である。ドイツは本当に変わっていいのか。世界が目注している。

翻って日本の状況はどうだろうか。ケルン経済研究所によれば、ドイツは2020年に、石油34%、天然ガス55%、石炭45%がロシアからの輸入だった。特に、天然ガスは

国内需要の9割以上を輸入に頼り、加えて輸入の半分以上をロシアに依存していたことになる。

一方日本は、2021年に輸入した化石燃料のうちロシアの割合は原油3.6% LNGで8.8%等で、原油は中東からの輸入が9割と中東依存度が際立つ。日本はエネルギーのロシア依存率は低いが、我が国のエネルギー自給率は12.1%(2019年度:資源エネルギー庁)と低く、同じ非資源国ドイツの34.6%(2019年)を大幅に下回る。加えて食料自給率も主な先進国が比較的高い中で、日本は38%(2019年度、カロリーベース:農水省)と低い(ドイツ95% 2019年)。今後、世界市場において、エネルギー、食料価格がさらに上昇すれば、日本はその影響を最も受ける国の1つである。価格高騰が時差を伴って国民生活へ大きな影響を与えることから免れることはできない。

日本のコロナ規制の緩和に伴い、昨年の秋以降ドイツから政官財の人々の日本訪問ラッシュが続いている。ドイツは、ロシアのウクライナ侵攻以降、同じ価値観を有する技術重視の日本に急速に接近しており、日本への期待は大きいように見える。しかし、日本側にそれを受け止める自覚と体制ができていないかは疑問である。

11月16-17日とドイツ側、日本側双方政官財のメンバーが集まって日独フォーラムが開催された。その第3セッションは、「エネルギー戦略の再策定と日独協力の可能性『ロシア依存脱却』と『脱炭素化』の両立に向けて」であり、日本側スピーカーは、保坂資源エネルギー庁長官、ドイツ側のスピーカーは、日独エネルギー変革協議会ドイツ側議長のペーター・ヘンニッケ氏であった。日本側の極めて漸進的かつ、現実的アプローチに対して、ドイツ側は、未来を見据えた、長期的かつ包括的エネルギー戦略をまず打ち立てた上で、個別のアプローチに入るという極めてインプレッシブなものであった。

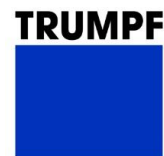
歴史的な深いつながりを持ちながら、日独両国はそれぞれの課題に専念する中で、日独のパートナーシップのあり方について真剣に話し合う機会が相対的に少なく、両国の関係は、その潜在性に比べて希薄であると感じている関係者は少なくない。

ロシアのウクライナ侵攻を契機とした時代の転換点に立つ今こそ、両国にとって、政府、企業を中心とした連携の必要性が求められている時はないだろう。

そのためには政官財の人的交流の促進と技術面での協力の実を継続的に挙げていく必要があるだろう。

(ソビエト連邦/ロシアという国への一考察(2)は次号に掲載します。)

トルンプ株式会社



■トルンプとは

トルンプ (TRUMPF SE+Co.KG) は、1923年に誕生したグローバル・リーディングカンパニーで、2023年に創業100年を迎えます。「板金加工機」「レーザ発振器」「プラズマ電源装置」「金属3Dプリンター」などを扱っており、本社はドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州シュツットガルト近郊のディッツィンゲン (Ditzingen) にあります。世界中に70以上の現地法人を持ち、昨年度 (2021年7月～2022年6月) の全世界での売上は42億2,300万ユーロ (日本円 5,600億円) でした。



ドイツ本社 (ディッツィンゲン)

■日本でのビジネスは60年以上

1960年代初めの日本では、商社を通じてトルンプのマシンが販売されていました。高度成長期の日本では、第二次産業 (工業) の成長に伴い、トルンプのマシン需要が増え続け、保守やメンテナンスも含めた総合的なお客様対応を行うため、1977年に日本法人「トルンプ株式会社」を創立しました。トルンプが欧州以外で現地法人を創立したのは、米国に続き日本が2番目で、アジアでは最も長い歴史を持つ現地法人です。



ジャーマンインダストリーパーク (横浜市緑区)

■日本とのゆかり

独トルンプ社の創業者であるクリスチャン・トルンプは、根付などの日本美術品のコレクターでした。現在の経営者一族であるライビンガー家は、日本やアジア専門の美術商をしていた時代があります。また、現CEOのニコラ・ライビンガー＝カミュラーは専攻が日本学で、トルンプ株式会社で3年ほど働いていたこともある等、日本との縁の深い人物です。CDOのマティアス・カミュラーも日本での就業経験があり、現在はバーデン＝ヴュルテンベルク州の在シュトゥットガルト日本国名誉領事を務めています。



パンチレーザ複合機
TruMatic 3000 fiber

■どんなところにトルンプ?

日常生活でトルンプ製品を見かけることは滅多にありません。しかし、様々な機械の大小様々な部品製作に使われていたり、産業機械の核となる部分に技術が採用されていたりします。自動車・産業機器・農機・印刷機などのメーカーから、注文生産を行う板金加工工場、半導体関連企業まで、幅広い業界の様々なお客様の生産現場で、弊社の製品や技術が活躍しています。

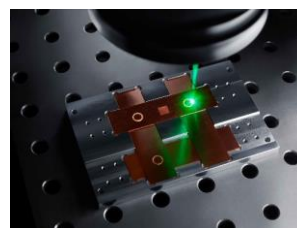


2022年11月CEO・CDO来日

■23年ぶりに日本人が日本法人社長に就任

トルンプ株式会社の現在の代表取締役社長は高梨真二郎です。2022年9月に前任のフォルカー・ヤコブセンから社長職を引継ぎました。

「日本のお客様に長くご愛顧いただき、日本法人は45周年を迎えることができました。今後も、日本のお客様により製品・ソリューションをお伝えすること、日本のお客様のニーズをドイツに伝え製品開発に反映させていくことを使命とし、日独の架け橋でありたいと思います」



E-Mobilityで重視の銅溶接
真価を発揮 グリーンレーザ



代表取締役社長高梨真二郎

「横浜日独協会10周年記念行事 大茶会」を終えて

大茶会委員長 南雲 淑子

この度2度の延期を経て、2022年11月21日三溪園の鶴翔閣にて大茶会を開催することが出来ました。



2018年6月早瀬名誉会長により10周年記念行事として、三溪園での大茶会が決定されて以来準備に邁進してまいりました。鶴翔閣には、立派なお玄関と和室が4部屋ありますので、茶席だけでなく香席、楽奏・舞踊の部屋、お弁当を食べる食事処を設けることを計画しました。幸いにして、香道の小畑先生、華道の風間先生、平家琵琶の荒尾先生、日本舞踊のスザネ柄戸先生、尺八の森先生に快くお引き受けいただき、お箏の大治理事、茶道の山口常務理事と私とで実現する目途が立ちました。

試食会を経て、茶道のお菓子は戸塚秀山庵の菊の練り切り、お弁当はなだ万に決定しました。

最初は2020年10月16日に開催を決めましたが、コロナの状況がひどく、延期を余儀なくされました。この時10周年記念式典は中止となりましたが、10周年記念誌を発行しました。

次に2021年10月15日に開催が決まり準備を進めてまいりましたが、またもやコロナの為にすでにお申込みを頂きながら延期という苦渋の決断をせざるを得ませんでした。



ヴィースホイ氏と成川会長

て参り、いよいよ当日を迎えることが出来ました。

ご招待客のご接待には、成川会長、大瀬、向井両副会長に加え、早瀬名誉会長もご協力して下さい、ご招待客の皆様にも大変喜んで頂くことが出来ました。特に三溪園の創始者の直系の原美里様にお越し頂きましたことは、横浜日独協会にとって大変名誉なことと存じます。



そして2022年はメインゲストのベルリン日独センター評議会議長のヴィースホイ (Wiesheu) 氏の来日に合わせて、11月21日(月)と決まり、今度こそと更に準備を進め

あいにくの雨により8:30に準備に入る予定が、9:00にずれ込み、大慌てで9:30の開始に間に合いましたことは、事前に全席イス席の完璧な配置図を作成下さいました岩崎会員の陰のご協力のおかげです。

お客様も時間通りに来て下さり、お茶席30分ずつ12回、お香席1時間ずつ6回、楽奏・舞踊の部屋30分ずつ12回、最初から最後まですべてきちっと時間通りの実施となりお客様を待たせることなく終わることが出来ました。

この奇跡のような1日を計画通りに運営できたのは、一重にご協力くださいました皆様のお陰様です。玄関での体温チェック、消毒と受付という重要なお迎えをして頂きました横浜日独協会事務局と理事の皆様の入り口でのスムーズな対応が時間通りの実施に繋がりました。また、正面玄関では池坊の風間先生の風格ある松の立花が皆様をお迎えしました。

そして、茶席は20名というコロナに対応した少なめのお客様でしたが、山口常務理事を中心とした水屋(裏方)の方々は、水道が遠かったため大変なご苦勞でお茶碗洗い、お湯沸かしその他をこなしてくださいました。

お香席は小畑先生がすべてを取り仕切って下さり、お客様には初めての方が多かったのですが、皆様にとっても喜ばれました。特にお香の順番を当てることが出来た方の喜びはひとしおでした。

楽奏・舞踊の部屋では、30分ごとに平家琵琶、日本舞踊、箏・尺八の演奏と目まぐるしいハードスケジュールでしたが、各先生方は12回もの演奏を心を込めてなさって下さいました。そのどれもが皆様にもっと聴きたいと思っていただくような素晴らしい演奏でしたが、多くの方に楽しんでいただくためには、このような短い時間での演奏はやむを得ないことでした。

心配していました食事処の集中も担当の方が上手にさばいて下さり、皆様に気持ち良く過ごして頂きました。

こうして190名のお客様をお迎えしての大茶会は、横浜日独協会員が一丸となり無事に終わることが出来ました。大茶会の準備から当日のお手伝いまで快くお引き受け頂き、力をお貸しくださいました皆様に厚く御礼申し上げます。



早瀬名誉会長御夫妻(左)と原御夫妻(右)

受付で何人かのお客様に お花はどこですか？と尋ねられ お連れしたことがありました

当日の朝は あいにくの雨で 履物や傘などの始末で玄関の迎え花をめでもできないお客様がいらっしゃることに気づき、ご案内したところで素養の無い私が説明できるはずもなく、特に海外からの客様には本当にごめんなさい。この場をお借りしてお詫び申し上げます。



池坊の立花には 木を山、草を水の象徴として、その中で自然の調和を表すとのこと。

まっすぐ伸びたおやかな黒松は 六角堂から取り寄せてきたものとか。

原三溪の住まい、鶴翔閣にふさわしい凛とした生け花でした。

個人的には香道のお部屋に生けられたものが掛け軸の表している世界を表現しているようで、とてもすてきだと思いました。オペラを総合芸術と呼ぶように、日本の文化のすばらしさをこの大茶会でご紹介できたことをとても誇りに思います。



11月21日、コロナの感染拡大で延期されていた、横浜日独協会創立10周年を記念する「大茶会」が、横浜の誇る名園である「三溪園」で開催されました。私は当日「茶席」に参加いたしました。

会場の「三溪園」は、関東大震災からの復興に尽力した横浜の大恩人である実業家の原富太郎（号は「三溪」）が、原家の私邸としてゼロから作り上げた和風の大庭園です。今回の「大茶会」の会場となった「鶴翔閣」は広さ950㎡（290坪弱）の茅葺屋根の三溪の大邸宅で、横山大観・前田青邨などの高名な画家が滞在し作品を残した場所としても知られています。こうした歴史からも、今回の「大茶会」に最もふさわしい場所だと感じました。



当日は幸運にも晴天に恵まれました。春の桜と並び「三溪園」が最も美しいとされる紅葉をお客様が堪能できたのは、良いおもてなしではなかったかと思えます。

私が参加した「茶席」は、コロナ禍で、マスク着用や、隣の方との間隔にも気を使う、普段のお茶席とはやや異なる雰囲気ではありましたが、それを補って余りある、特別にお借りできた薬師寺の管主を務められた高田好胤先生の掛け軸や、池坊の茶花、選りすぐられた茶道具、季節の菊を模ったお菓子、静岡から取り寄せたオーガニックのまろやかな抹茶で点てられた美味しいお茶、衣擦れの音も美しい着物姿の女性方など、晩秋の木漏れ日のさす部屋は和のハーモニーで溢れ、私は目にも心にも優しい至福の一時を堪能しました。外国人のお客様も、南雲先生の簡潔で分かりやすい説明に頷きながら、茶の湯を満喫しておられました。「茶席」はのべ200人近くのお客様に体験していただけたと伺っております。



「大茶会」は会場や開催時期の選択も含めて、「茶席」や「香席」での体験、「華道」や「平家琵琶」、「日本舞踊」、「尺八」、「琴」の鑑賞など、普段は我々日本人でも一度にはなかなか経験できない機会をお客様にご案内でき、日本の様式美と和の精神の一体化した素晴らしい空間でお過ごしいただけた、横浜日



独協会10周年記念行事に相応しい催しだったと思います。

この日のために永く精進されてこられた多くの関係者の皆様のご努力に感謝いたします。



香道に参加して

地野 洋子

何と雅な世界なのだろう、香道というのは—これが初めて実際に体験した感想でした。以前に横浜日独協会の講演配信映像で今回も香道体験にご尽力下さった会員でいらっしゃる、小畑洋子御家流師範のお話を伺ったことがありましたが、実際に三溪園鶴翔閣の雨に洗われて美しい庭園に面し、床の間には池坊のお花が生けられた広い和室での実演体験は、一端を見せて頂いただけで一つ一つの手順すべてが興味深く、心に残るものでした。

香道とは「茶道、華道と並ぶ三芸道の一つで、一連の作法のもとに香木をたき、香の中に文学的情緒を見出すことにより人間形成をはかる芸術である」と当日頂いたプリントにありましたが、小冊子にも日本語、英語の詳しい解説や実演の流れも示されていて、講師のお話を伺いながら楽しく組香の香りを聞くことができました。ドイツの方々も大勢参加されていて、講師の英語説明に耳を傾けていられましたが、きっと想像を超える体験だったのではと思います。



当日は、紅葉の時に因んでテーマとなる和歌が紹介され、「紅葉香」という組香が説明と共に始まりました。椅子席に着いた参加者それぞれが実際に順次五種類の香木を聞いた後、香元がその五種の香包みの中から一つを取り出し、本香として再度たき出した香りがどれであったのかを、参加者それぞれが聞き分け、手元にある小さい記録紙に記した後、集められていきました。最後に、集められた各参加者の答えや、正解者の名前、テーマの和歌、紅葉香組み立ての植物名、香の種類等、当日組香のすべてが紅と黒の筆で大きな記録和紙に書かれました。まさに風雅な芸の道だと感じ入ったことでした。



たまたま運よく正解で一入思い出深い体験となりましたが、「当てることが組香の目的ではなく、香が織りなす詩的世界に心を遊ばせことに意味がある」ということで、ひたすら香木の香りに聞き入ることによって心を解き放ち、紅葉盛りの野に遊ぶ境地を参加者全員で共有することが当日の紅葉香の主眼であると、伺いました。

優雅で繊細、洗練された日本の美と伝統文化の神髄をすべて包み込んだ渾然一体の風雅の世界、その奥深い世界の一端を体験することができた貴重な機会に感謝すると共に、多くの内外の方々にも実際に触れる機会があればと思いました。

世界中でずっと続いていたコロナ禍による閉塞感未だ残り、ウクライナや世界各地での紛争、地球規模の異常気象による大災害、食料、エネルギー危機にある現在、惨禍にあえぐ無数の人達の中であって、きな臭いだけではなく、香木の香りを味わうことのできることを心からありがたく思いました。



香の聞き方

香道では香木の香りを「嗅ぐ」のではなく、「聞く」と表現しますが、それは香席の参加者が用意された香木の香りの違いを聞き分けるため、あたたかもかすかな音を耳をそばだてて聞くがごとく、微妙な香りに意識を集中させるということを意味しています。

日舞と邦楽演奏に敬意と感謝を込めて

理事 西条 りみ

雨上がりの庭を眺めつつ縁側に座ってお弁当を召し上がっているお客様の耳にも、きっと邦楽のお部屋からの音色が届いていただろう。今回、花柳流唯一のドイツ人名取スザンネさんによる日本舞踊、尺八都山流大師範森さん、正調平家琵琶奏者荒尾さん、箏生田流正派大師範大治さん、この四人の先生方の舞と演奏が披露された。スザンネさんが、畳の上を淑やかに舞う姿に感動した。スザンネさんに伺うと、30年ほど前の、デュッセルドルフでの良い師との出会いが日舞を始めるきっかけだったそうだ。圧巻だったのは、お琴の弾き語りと尺八、日舞のコラボ「荒城の月」であった。大治さんによると古曲では唄を唄いながら演奏するのが前提だそうであるが、私はお琴の「弾き語り」は始めて拝聴した。「春 高樓の花の宴」から始まる唄の情景を、二本の扇子を巧みに使い「月」を表現しながらスザンネさんが舞っていく。視覚的にも聴覚的にもこの曲の世界を堪能することができた。



けることはとても大変なこと。体調の悪い日もあるからね。」とおっしゃっていた。「人生」という言葉が尺八の音色に重なって聞こえた。晩秋の日が落ちて尚、奏楽の部屋の音色は会の最後まで、部屋に隣接している中庭の木の小枝を揺らすように響いていた。



大茶会スナップ写真集



「邦楽のお部屋はとても楽しみだったの。特に琵琶は珍しいから。」というお客様の言葉を耳にした時、私も琵琶という楽器を博物館以外で見たことがなかったことに気づいた。荒尾さんのご説明で印象に残ったのは「平家物語」の有名な冒頭部分「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理を表す」は、ここだけで、琵琶の音にのせた語りの方が5分かかるとのことだった。荒尾さんの平家への思いがこもった演奏に、平家の運命を思い巡らせた。ドイツ人のお客様からは「西洋人にとって音楽とは、演奏と共に観客の気持ちが盛り上がっていくもの。だから、この悲しい静かな響きはとても興味深い。」という感想を頂いた。千年ほど前の悲劇が唄われていることをご説明すると、「歌詞が分からないのは残念だが、悲しみは伝わってきます。」と話して下さった。今回、日舞と邦楽の奥深さに触れる機会を頂いたことを、出演の先生方に感謝申し上げたいと思う。森さんが「人生も同じだけれど、長く続

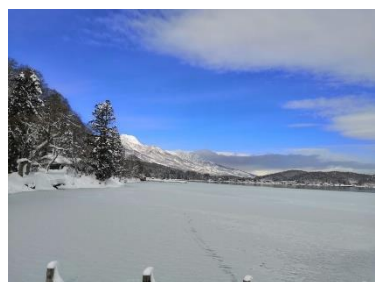


メッツガー一家在日100年の歴史と チターの調べを拝聴して



シメオンソン亜希子

大堀氏との出会いは今年の3月になります。インターネットで偶然見つけた日瑞関係ページ「フランツ・メッツガー（Jr）の体験した戦時下の横浜、野尻湖」のタイトルに心惹かれ拝読していたところ、私達家族が住んでいる国際村のキャビンにメッツガー氏が疎開されていたとの記載があり大変驚きました。素敵な偶然に思わずメッセージをお送りしたのがきっかけです。



過ごされた野尻湖もきっと今と変らぬ姿であったのではと思います。

今私はその疎開先のキャビンから野尻湖を眺め、この文章を書いています。時折手を休め景色を眺めると自然に癒され心穏やかな気持ちになります。メッツガー氏が



大堀氏のご講演は、第1次世界大戦で日本の捕虜となり4697人と共に来日したメッツガー氏の歴史を知ると同時に捕虜として

日本を訪れたドイツ兵の歴史を振り返ることができる、とても興味深い内容でした。捕虜収容所で楽団に入っていたメッツガー氏の写真。膝の上にあるチターが、ご子息メッツガーJr氏に引き継がれ、100年過ぎた今なお素敵な音色を奏でていることは本当に素晴らしいと感じました。

第一次世界大戦終戦後、日本に残られたドイツ兵の方が、バームクーヘンのユーハイム・敷島製パンの初代技師長であったことは、お恥ずかしながら初めて知る事で、日本人になじみの深いバームクーヘンや敷島製パンの歴史を垣間見ることが出来ました。

第2次世界大戦では横浜港新港埠頭内で、ドイツ艦船「ウッカーマルク」他が爆発しドイツ海軍の将兵61名を含む102名が死亡されたことは戦争の凄まじさを物語っています。その負傷者を10名ほどお世話されたメッツガー氏と当時を覚えていらっしゃるメッツガーJr氏はどんなお気持ちであったのか想像もつきません。

2度とその様な惨劇は繰り返してはいけません。そんな思いもふと頭の中を過りました。

疎開先の野尻湖国際村は、昨年開村100周年を迎えました。大堀氏のご講演内容の通り、会員制のボランティア団体「野尻湖協会」で成り立っています。この度このような素敵なご縁を頂き、大堀 聡氏の講演とフランツメッツガー氏のチター演奏を拝聴する機会を得られたこと、とても嬉しく思います。長野の自宅から主人と2人でオンライン参加し、メッツガー氏との画面越しの対面は、初めてなのに以前お会いしたことがあるような不思議な感覚でした。

古き良きを大事に思うメンバーが多いお陰で、昔ながらの外観を残したキャビンや舗装されていない道が、今なお多く残る場所でもあります。第2次世界大戦中、国際村のメンバーは祖国へ帰国したと聞いています。その為当時の情報が余り残されておらず、国際村で過ごされたメッツガー氏のお話は、とても貴重なものでした。

フランツ・メッツガーJr氏と白井克弥氏のチター演奏は心躍るものでした。私にとってチターの演奏を聞くのは初めての経験で、会場で聞いていらっしゃる方々は生演奏を耳にすることができとても羨ましく思えました。特にメッツガーJr氏のチターは2度の戦火と関東大震災をくぐり抜け、今も昔と変わらぬ音色を届けてくれていると思うと感慨深いものがありました。演目のポルカの演奏が始まると民族衣装を身にまとった、かわいらしい男女が踊る情景が思い描かれ、有名なハリーライムのテーマが演奏されたときは自然と身体がリズムに乗って動いていました。メッツガーJr氏が大切にされているチターの音色、100年の時を超えて奏でられるリズムに大変感動致しました。

最後に、この度お招き頂けたこと心から感謝致します。戦争を知らない私たち世代にとってメッツガー氏のように実体験された方の情報を大堀氏のご講演を通して拝聴できることは、とても貴重な機会でした。ドイツと日本の繋がり、心躍るチター演奏。とても贅沢な時間を過ごさせて頂きました。有難うございます。



フランツ・メッツガーJr氏(右)と白井克弥氏のチター演奏

劇場を揺るがす堂々たる歌声

「バリトン島村武男の世界」を聴いて

理事 小貫治朗

当協会会員の島村武男さんの声楽コンサート「バリトン島村武男の世界」が、2022年11月10日、横浜みなとみらい小ホールで開催されました。このコンサートは、日独相互交流に対する多大な貢献に対して、外務大臣表彰を受賞され、また駐日ドイツ大使から日独友好賞を授与された、当協会名誉会長早瀬勇氏への感謝に寄せて、という副題の付いた特別の企画で、当協会も後援に名を連ねました。参加者は130名を超え、早瀬ご夫妻をはじめ、多数の会員の参加がありました。



早瀬名誉会長と島村氏

曲目は「赤とんぼ」「平城山」などの日本歌謡から、イタリアカンツォーネ「妖精の眼差し」、イタリアオペラ椿姫から「プロヴァンスの海と陸」、ドイツ歌曲冬の旅から「魔王」などで、それら幅広い名曲の数々を、圧倒的な声量で歌いあげる島村さんのバリトンが、ホールに響き渡りました。特に、ポピュラーな「魔王」を聴かれた、ある年配の方は、若い頃音楽の授業で聞いた、フィッシャー・ディスカウを彷彿させ、胸が震える思いで聞きほれました、と仰しゃっていました。コロナ再燃の兆しのある中、声を出さずに拍手でご喝采下さい、との会場アナウンスにもかかわらず、感激と感動のあまり、ブラヴォーの掛け声が続くつも飛び交いました。

また、ピアノ伴奏された沼田宏行さんのピアノソロの時間も圧巻でした。ドビュッシーの「花火」、右手と左手がクロスを頻繁に繰り返す難曲中の難曲を、いとも簡単に鮮やかに弾いてくれました。エッフェル塔の向こうの夜空に咲く、大輪の花火を思い浮かべて聞き入った方もいらっしやっただけではありません。公演後、氏に伺いましたら、国際ドビュッシーピアノコンクールに優勝された経歴をお持ちとのこと、なるほどと納得しました。

最後に、素晴らしい音楽を堪能させていただいたお二人に、改めて感謝の意を表するとともに、今後の更なるご活躍をお祈りすることを付け加えて、感想とさせていただきます。



公演後くつろぐ島村さんと沼田さん

根岸外人墓地 墓前祭

常務理事 大堀 聰

1942年11月30日、横浜港で起こったドイツ艦艇の大爆発事故のドイツ人犠牲者が、根岸の外人墓地に眠っています。彼らの墓前祭が、11月19日（土）に行われました。

今年は事故の発生からちょうど80年という節目の年でしたが、昨年同様に横浜日独協会会員の森利子さん、10月の月例会でチターを演奏したフランツ・メツガーさんが爆発の体験者として参加しました。また昨年会長に就任した当協会の成川会長も初めて参加しました。

式はドイツ大使館のキーゼヴェッター武官の挨拶に続き、今回も日本側を代表して私が挨拶をして、爆発事故の風化を皆で防ぐ様、訴えました。

挨拶する大堀氏



その後は仲尾台中学校吹奏楽部による追悼演奏の中、全員が献花をしました。またドイツ学園からは社会科授業の一環として学生が参加し、爆発の体験者らと交流を図りました。



成川会長(中央)とキーゼヴェッター武官夫妻

インターンシップ研修報告

「2度目の来日とインターンシップ研修」

2014年度日本派遣作文高校生 Ricarda Schwarzbart



みなさん、こんにちは。

Mein Name ist Ricarda Schwarzbart, Juristin aus München. Im Oktober 2022 bin ich für ein dreimonatiges Praktikum am Deutschen Institut für Japanstudien nach Tokyo gekommen.

Hier arbeite ich mit Barbara Holthus zusammen an einem Forschungsprojekt über Japan und Haustiere und ich kann besonders viel über das japanische Tierschutzrecht und die Mensch-Tier-Beziehung lernen. In Shinjuku wohne ich in einem Sharehouse mit 5 anderen Mitbewohnern zusammen. Alle kommen aus unterschiedlichen Ländern und es ist interessant gemeinsam ins Gespräch zu kommen.

(私の名前は リカルダ・シュヴァルトバルト Ricarda Schwarzbart です。ミュンヘンから来ました法学部学生です。本年10月より『ドイツ日本研究所』での3ヶ月インターンシップ研修のため東京に来ております。当研究所では、バーバラ・ホルトウス氏と共に日本及びペット動物に関する研究プロジェクトに従事していますが、特に日本における動物保護法と人間-動物の関係につき学んでいます。

現在は5人の仲間達と新宿のシェアハウスで共同生活を送っています。皆異なる国からの仲間ですので、彼らとの話し合いを楽しんでいます。)

一東京での生活がとても気に入っていますし、東京の日常生活を知ることができるのは、特に素晴らしい機会です。一

Es ist für mich eine große Freude, nach all den Jahren wieder in Japan zu sein. Das erste mal als ich hier war, war ich erst 17 Jahre alt. Nun im Alter von 26 ist es durchaus eine andere Erfahrung. Es ist eine Herausforderung sich hier selbst zu organisieren, aber auch ein Privileg meinem Interessen an der japanischen Kultur nachgehen zu können und alleine am Wochenende Ausflüge zu unternehmen und das Land besser kennenzulernen. Als Schülerin wurde das Fundament für mein Interesse an Japan gelegt, welches nachhaltig wirkt und mich sicherlich mein Leben lang begleiten wird.

(何年か振りに再び日本に来られてとても嬉しいです。初めての来日は未だ17歳でしたが現在もう26歳となり、全く異なる経験を積んでいます。ここでは何事も自分自身で準備することは一つの試練ですが、日本文化への私の興味を追求して、週末には一人で小旅行に出かけ、この国をより一層知ることが出来る利点もあります。

私の日本への興味は、高校生時代に精神的基盤として根付いており、それは今後も継続しきつと私の人生に寄り添ってゆくことでしょう。)

一ですから、横浜の JDG(日独協会) とフランクフルトの DJG(独日協会) のメンバーの皆さんには、私の人生を大きく豊かにしてくれたことに、今でも大変感謝しています。一

Ricarda Schwarzbart: 2014 年度春 フランクフルト独日協会派遣の作文優秀高校生として初来日。同市郊外のノイシュタット市出身。1週間横浜にてホームステイを体験(能登監事宅)。上記寄稿報告のうちドイツ語訳文(訳:能登)以外の日本語は、Ricarda さん本人による日本語原文のままです。 JDGY 能登 崇

「1977年の私 — ミュンヘンにて」



会員 中村比早子

1977年の夏、私は両親には無断で、春からホームステイしていたニュルンベルクのドイツ人家庭を飛び出しミュンヘンに移り住んだ。美術や音楽が好きな私は、何度か訪れるうちに、ミュンヘンにすっかり魅了されてしまったのだ。一生に一度のチャンス、同じ美術を学ぶならミュンヘンだと確信した。

この暴挙に日本の両親は仰天したはずだ。知り合いのドイツ人宅に寄宿するならと一人娘のドイツ行を許可したのであって、私の独断の行動は論外だった。しかし、ドイツに渡ってしまえばこちらの勝ちだった。

両親を納得させるために、規則の厳しいカトリックの女子寮に何度も交渉し、潜り込んだ。それからミュンヘン大学の外国人入学試験のために必死で昼夜ドイツ語を勉強し、運よく合格することができた。

大学ではイタリア美術史を選択した。授業は少人数で、内容は濃く素晴らしかった。しかし私にとっては、まずドイツ語での授業内容を理解するのが大変だった。毎日深夜の3時ごろまで、ソニーのラジカセに録音した授業内容を聞き返し、復習と予習に明け暮れる日々が続いた。

しかし最難関だったのは、授業では自分の意見の発信も求められる事だった。中国人やスウェーデン人は文法などお構いなく即座に発言する。しかし私はタイムリーに発言できないため、周りからは意見のない日本人と見なされていることに気付いた。ここでは、「沈黙は金」、ではなかった。それからもう恥も外聞もかなぐり捨てて、出来るだけ討論に加わった。

あれから数十年たった現在、講演会の後にはいつも質問するのは、この経験からだと思う。たった一年間のドイツ体験だったが、私にとっては何倍もの年月を過ごしたような、充実した日々だった。(了)

クリスマス会 (霧笛楼にて)



12月10日(土)、2022年最後のイベント「クリスマス会」が横濱元町霧笛楼で開催されました。南雲常務理事の司会で、まずは成川会長挨拶、早瀬名誉会長の乾杯と続き、さっそく美味しいお料理。落ち着いたところで、終わったばかりの「大茶会」についてそれぞれの担当から発表があり、最後は、美しいチャターの音色でクリスマスの雰囲気盛り上がり、締め挨拶は大瀬副会長でした。



海外に日本文化を紹介した人々

常務理事 寺澤 行忠

本コラムでは、これまでに日本文化を海外に紹介した人々を、いくつかのテーマのもとに多数扱ってきたが、ここではこれまでに扱わなかった人々を取り上げてみたい。

日本文化を早い時期に海外に紹介したのは、ドイツ人、**エンゲルベルト・ケンペル**である。彼は1690年に長崎のオランダ商館付の医師として来日したが、持ち前の旺盛な好奇心で、日本の実情を詳しく観察し、研究した。その成果は『日本誌』として刊行され、この著作が以後のヨーロッパ人の日本観に、きわめて大きな影響を与えた。モンテスキュー、ヴォルテール、レッシング、カント、デイドロなどの著作にも、その影響がみられる。



シーボルト

ケンペルが日本を去って約130年後、やはりオランダ商館の医官として来日したのが、ドイツ人、**フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト**である。医師として日本人を診療し、彼のもとに集まってくる門人たちに最新の西洋医学、西洋科学を教授するとともに、植物学、動物学、鉱物学などの調査研究にも力を注いだ。帰国に際し、禁制品の地図を国外に持ち出そうとしたことが発覚し、国外追放処分となった。いわゆるシーボルト事件である。



帰国後、“Nippon”『日本』が刊行され、それによって日本の地理、歴史、宗教、政治、経済など諸分野が、“Fauna Japonica”『日本動物誌』、“Flora Japonica”

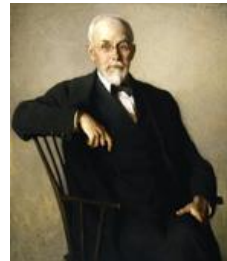
『日本植物誌』によって、日本の動植物多数がヨーロッパに紹介された。また日本人女性楠本其扇（お滝）と結婚し、アジサイに妻の名にちなみ「オタクサ」と命名している。

日本で精力的に収集した4,700点余りに上る彼のコレクションはオランダが購入し、これがライデン国立博物館の基礎になった。

その後シーボルトの追放令は解除され、1859年に再び来日した。この時も日本コレクションの収集に力を入れ、約6,000点に上るコレクションを収集、これがミュンヘン五大陸博物館（旧ミュンヘン国立民族学博物館）の基礎を築くことになった。

エルヴィン・ベルツはいわゆるお雇い外国人として1876年来日、東京大学で医学を教え、日本の医学の発展

に多大な貢献をした。その傍ら、日本美術にも関心を持ち、膨大な数の美術品を購入した。美術品のみならず、陶器、漆器、工芸品、織物、武具等多岐にわたる約6,000点に及ぶベルツのコレクションは、いまリンデン博物館に所蔵されて、同館の日本美術コレクションの中核をなしている。



エドワード・モース

アメリカ人では、明治初年に**エドワード・モース**がお雇い外国人として来日、東大で動物学を講じた。大森貝塚を発見したことで知られるが、彼は江戸・明治初期の庶民文化を深く愛し、約5,000点の陶磁器と大量の民俗資料を収集した。後に陶磁器はボストン美術館に、それ以外の民俗資料などはボストン郊外、セーラムにあるピーボディー・エセックス博物館に売却された。

このモースのコレクションは、19世紀の日本でつくられたあらゆる種類の陶磁器をすべて網羅している点で、他に見られない特色を持っている。シーボルト・コレクションと共に、在外日本コレクションを代表するものとなっている。

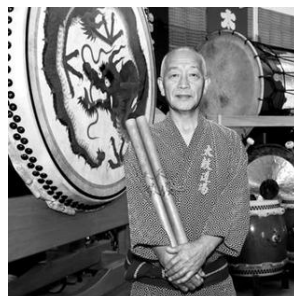


千玄室大宗匠

茶道の裏千家・千玄室大宗匠も、世界に茶道を紹介する上で、大きな役割を果たした。

「一盤（ワン）からピースフルネスを」を理念として、海外に約40か国、110余か所に拠点をつくった。海外の登録会員は5,000-10,000人、それ以外に未登録で稽古している者が2-3万人いるという。

ミュンヘンの広大なイギリス公園には、ミュンヘンオリンピックの際に裏千家から寄贈された立派な茶室があり、イギリス公園の中でも最も人気のある名所の一つとなっている。



田中誠一氏

和太鼓がアメリカで普及するについては、**田中誠一氏**の尽力によるところが大きい。田中氏は1967年に渡米して活動を開始、サンフランシスコに太鼓道場を創設した後も、何度も日本に帰って、日本各地の有名な太鼓の師匠について修業を積み、技術を磨いた。それから半世紀余りを経て、いまアメリカには約400の太鼓グループがあるが、そのほとんどは田中氏の門下生で、氏に多少でも手ほどきを受けた人の数は、1万5千人を超えるという。

太鼓を通じて、日米文化交流に果たした役割は大きい。

文化委員会企画

教養講座「百人一首をよむ」

【日時】原則として毎月第1水曜日 13:00～14:30

- 1月11日(水) オンライン講座
- 2月1日(水) オンライン講座
- 3月1日(水) オンライン講座
- 4月5日(水) オンライン講座

【講師】寺澤行忠常務理事(慶応義塾大学名誉教授)

* 今後、WEB 会員（メールアドレスを登録されている会員）には、イベントの参加不参加を問う葉書は差し上げませんので、メール又はホームページからお申し込み下さい。

当協会後援！

情熱のドイツスターピアニスト 古畑祥子さん 横浜フランクフルト友好都市コンサートのご案内

- ◇ 日 時: 2023年2月26日(日) 14時開催
- ◇ 場 所: 神奈川県民ホール
- ◇ 入場料: 2,000円(協会会員 特別価格)
- ◇ 申込み: sfmusicpromotion@gmail.com
Tel: 080-1264-1046(堤箸)
090-6168-1251(井出)

◇ 演奏曲目

ショパン: ノクターン 嬰ハ短調遺作、変ニ長調作品
27の2、幻想即興曲、バラード1番、英雄ポロネーズ
リスト: コンソレーション、愛の夢、バッハの動機による
変奏曲、ハンガリー狂詩曲12番

<新入会員> 津澤元一様

編集後記:

コロナ禍で延び延びになっておりました「大茶会」が無事に終わり、安堵しております。
お客様も200人近い数でしたが、スタッフの数も60人ほどでにぎやかでした。南雲常務理事の企画力と実行力、人脈の広さにも感嘆しました。
お茶、お香、楽奏・舞踊の担当の皆さんから説明の原稿を頂いて冊子を日本語だけでなく英語、ドイツ語訳も入れて作りましてところ大変好評でしたので嬉しく思っております。実際のそれぞれのお席でもドイツ語と英語でも説明がありましたので、ドイツ人のお客様たちも喜ばれていました。
2023年が平和で楽しい年でありますように！（山口）

イベント予定

■2023年1月 イベント:

- ・日時: 1月21日(土) 13:30～15:00 会員のみ
- ・会場: 戸塚区民文化センター(多目的室)
- ・講演: クラウス・フィーツェ氏
(ドイツ大使館首席公使)
- ・参加費: 1,000円
- ・演題: 「時代の変化」(Zeitenwende)
- ・お申込み: 下記 URL よりお申込み下さい。
<https://ws.formzu.net/dist/S88344053/>
当協会ホームページにリンクがあります。

■2023年2月 イベント:

- ・日時: 2月18日(土) 13:30～15:00 会員のみ
- ・会場: 長浜ホール(野口英世記念公園内)
定員25名(先着順) 同時にオンライン配信予定
- ・講演: 成川哲夫(横浜日独協会会長)
- ・参加費: 1,000円
- ・演題: 私とドイツ/横浜日独協会の中長期ビジョンと今後の運営(含会員との意見交換)

■2023年3月 イベント:

- ・日時: 3月18日(土) PM
- ・講演: 小熊誠神奈川大学学長(予定)
詳細は近くなりましたらホームページでご確認ください。

*コロナ禍情勢の推移により、中止/延期/オンラインの可能性あります。



横浜日独協会 動画チャンネル!

深刻なエネルギー問題等、タイムリーな話題のプレゼン動画を公開!
当協会ホームページにリンクがあります。



認定NPO法人横浜日独協会会報 発行 2023.1.1 (第65号)

所在地: 〒247-0007
横浜市栄区小菅ケ谷1-2-1 地球市民かながわプラザ
NPOなどのための事務室内 事務局: 齊藤・野澤・小貫
Tel: 080-7807-7236
E-Mail: jdg-yokohama2010@outlook.jp
会報編集責任者: 山口 利由子
E-Mail: riyuko.yamaguchi@gmail.com
横浜日独協会ホームページ <http://jdgysub.jp>



法人会員

株式会社文芸社 ウィンクレル株式会社 ボッシュ株式会社 トルンプ株式会社 公益財団法人登戸学寮
ワインブティック伏見 モトスミ・ブレーメン通り商店街振興組合 横浜国立大学一成長戦略研究センター
株式会社コトブキ 神奈川大学 ケルヒャージャパン株式会社 一般社団法人如水会 横浜支部
キャリア・デベロプメント・アソシエイツ(株) 富士・フォイトハイドロ株式会社 日独産業協会(DJW)